

種
文学賞

令和三年第二回

作品集

小学2～3年生の部

小学4～6年生の部



令和三年二回目の種文学賞は、次のお題で作品を募集しました。

小学二～三年生の部 「けが」

小学四～六年生の部 「地の文をつくろう くいよいよ」

中学生～高校生の部 「地の文をつくろう カスタム なんだったの」

「スポーツの比較」

ここでは、小学二～三年生の部と、小学四～六年生の部の全作品を紹介します。どれもすばらしい文章ですので、ぜひお楽しみください！

※ 筆者・作者名はペンネームで記してあります。

【小学二〜三年生の部 「けが」】

筆者 さしや おのえ (小二)

おにいちゃんがこっせつした

ぼくのおにいちゃんがこっせつしたことがあります。ぼくが小学校一年生のときこっせつしました。ゆびをつかうゲームをしておられました。右手のくすりゆびをへんかたちにまげておられました。おにいちゃんはびょういんに三日いきました。おにいちゃんのくすりゆびがなおるまで一か月かかりました。そのあいだおにいちゃんはいたそうになおるのをまっていました。ぼくはしんぱいでした。ごはんをたべるときおにいちゃんは右ききなのでお母さんにたべさせてもらっていました。おにいちゃんは手をおさえながらなくてたべていました。また、べんきょうするとき左手できたなく字をかいていました。お母さんがおにいちゃんに

「大じょうぶだからなかないで。」

とはげまして言っていました。おにいちゃんがお母さんに

「ありがとう。」

といていました。お母さんはおいしゃさんだからほうたいをまいていました。こっせつした人をおかんびょうしてすごいとぼくはおもいました。ぼくはいたいおもいをしたくないからおにいちゃんとおなじことをしないようきをつけます。

筆者 くどうきょうたろう (小二)

こっせつ

ぼくは、一年生のころボールおにごっこで左足をこっせつしました。そのときはものすごくいたくてくつしたをはくときも足がいたくてないまま。あとこっせつしていたらなっているからてのれんしゅうにもいけませんでした。足はこっせつしてからやく六週間ろくしゅうかんでなりました。そして、からてのれんしゅうにもどったときにはとてもよわくなっていました。けれど、それからがんばってれんしゅうして前よりつよくなりました。でも、こっせつして足がなおったあとでも足をひねってこっせつしたりねんぎをしたりしやすくなっていました。それは、こっせつしたときから足をうごかしたらいたので、まったくうごかしていなかったからです。足をこっせつしたらこのように、わるいことだけおこっていいことは一つもありませんでした。だから、これからはそういうボールあそびでもそんなにひっしにならずに「たのしいな。」とおもえるぐらいにやりたいです。

筆者 サラブレッド (小三)

いちどもけがしたことがない

ぼくは、一どもけがをしたことがありません。ぼくはラグビーをなっています。ラグビーはタックルやスクラム、モールという体と体をぶつけることがよくあるのにぼくは、一回もけがしたことがありません。

また、ぼくは公園こうえんに遊びあそびに行ったときうしろ歩きをしていたら、がい灯とうにあたっあっていつかいたおれたことがあります。ところが、すぐおきて、まっ

すぐ立ちあがって頭をかくにんしたら、たんこぶ一つもできていなかったです。

ぼくはうんがいいとおもいます。ぼくはうんがよかったからけがをしていないのだと思います。これからもぼくは、うんがいいとじています。

筆者 ふつう (小三)

こわかったけが



この文章をよむ人は、大きなケガをしたことがありますか。わたしは、大きなケガをしたことがありますのでそのことを話します。

年少のときに、お母さんとあそんでいました。そのときにベッドから落ちました。なにがあつたかわからなかったです。目のよこを切っていました。すぐにびょういんにいって、ぬってもらいました。急にびょういんにいってぬったので、とてもこわかったです。ぬいおわったら、ひやけどめと、テープをもらいました。さいしょは、何に使うか分かりませんでした。次の日の朝に、教えてもらってやっと分かりました。なににつかうかという、きず口がひやけしないようにするためです。ひやけどもをぬっておかないと、切った所がただけがへんな色になってしまふのです。テープも日にあたらないうにするためにはっておきます。それを半年ぐらい使っていたら、きずも目立たなくなりました。これからも、いろいろなケガをすると思うからしんちように行動したいと思います。

筆者 まゆか (小三)

リルとリラのできごと

森の中に、少しはなれた、二けんの家がありました。その一けんにすんでいるリルがもう一けんの家に住すんでいる友だちのリラのおうちに行くところ、石につまづいてしまいこけてしまいました。けれど、リルは、すりきずですみました。リルが、リラの家につくと、リルが、「木のぼろ！」と叫びました。リラは、のぼるじしんがなくて「うん。」と小さな声でいきました。木に登ったら、しばらくすると、リラが、木からおっこちてしまいました。リラは、ねんぎをしまい、まっばづえがいつも一緒いっしょになりました。あそぶこともできず、悲かなしいひびでした。

リラは、いいました「すりきずとねんぎでは、すりきずですむ方が、ラッキーなことなんだね」と。

リルは、「そうだね。」と、いいました。

「これから、安全あんぜんをかくにんしてから、物ものごとをやったり、あそんだりしようね」とリルとリラは思ったのでした。

【小学四〜六年生の部 「地の文をつくろう くいよいよ」】

☆ このお題は、二人の人物の会話文だけが書かれている場面を読んで、①その場面までのあらすじを百字以内で作る、②地の文を書き加えて場面を完成させる、という二つの課題にとりくむという内容になっています。

まずは、その会話文を読んだ上で、それぞれの作品をご覧ください。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「どうしたの、つかれた顔。よく寝られなかった？」

「いや、そんなことはないけど。」

「そう、それならいいけど。じゃあ、行きましょ。」

「いよいよね。」

「ああ、そうだな。」

「いよいよだ。」

作者 オセロ (小四)

(これまでのあらすじ)

夏休み、お父さんとお母さんが広島のおじいちゃんたちにれんらくをとりあってとうとう三週間がたつただろうか。明日のうちにおじいちゃんたちの家に行く事に決まった。それを聞いたぼくと妹はおねがごとくおどっていた。(百字)

「おはよう」

妹はふだんから元気だが今日はいつにもまして元気だ。

「ああ、おはよう」

ねおきだからぼーっとしていたあたまがようやく目をさましたのかぼくは妹の五倍くらい小さい声しかだせなかった。

「どうしたの、つかれた顔。よく寝られなかった？」

実は昨日わくわくしすぎたから今日のための用意をしていた。ふと顔を上げるともう深夜の二時という事がわかってすぐねた。たぶん今日の声の小

さい原因は、すいみん不足だろう。そう思った。

「いや、そんなことないけど」

と答えておいた。とにかく妹は心配しようだ。だから、せめて広島に行くときは心配させないようにしようと思った。

「そう、それならいいけど。じゃあ、行きましょ」

自分の荷物をせおいながら妹はそう言った。そして、

「いよいよね」

と言って、スキップしながら車の中にはいっていった。

「ああ、そうだな」

ものすごくねむかったから車の中でねるじゅんびをしながら、ぼくはそう言った。

「いよいよだ」

自分にもうふをかけながらも、やはり気持ちはわくわくしていたのか、ふいにそんな言葉が出てきた。ぼくがねるじゅんびをしているあいだに妹は
気持きもちちよさそうにねていた。

作者 うしなこ(小四)



(これまでのあらすじ)

小学六年生で同級生のゆみとけんは小学生生活で最後のげき発表会に出ている。げきの内容はパン屋の話だ。クラスのみんなで作った大きいパンをげきの後半でぶたいに運ぶという重大な役わりが二人にはあった。(九十五字)

げきの後半、パン屋のおすめ役のゆみとおすこ役のけんは場面になった。大きなパンを出す二つ前の重要な場面なのでセリフをまちがえることはできない。きんちょうの中、最初にセリフを言うのはゆみだ。

「おはよう」

ゆみは大きな声で、ハキハキ言えた。次はけんの番だったが、セリフをかまわずに言えるかドキドキしている。

「ああ、おはよう」

きんちょうにより、やや小さめの声になってしまったが、無事に言えた。次はゆみの番だ。パン屋のおすこ(けん)のつかれた顔を心配する言葉だ。そのため、やさしく言わなければいけない。ただし、弱すぎる声でもダメなので、できるだけ大きく言うことを心がけていた。

「どうしたの、つかれた顔。よく寝られなかった？」

少し強く言ってしまったが上手に感情をのせて言えた。けんはきんちょうで心ぞうがバクバクしていた。なぜなら、ここまでだれも失敗していないのに失敗してしまうかもしれないからだ。そんなことを考えていたら、すぐに順番がきた。

「いや、そんなことないけど」

短いセリフだがふつうに会話しているように自然に言えた。けんは心の中でガッツポーズをした。次のゆみのセリフでこの場面が終わる。そのため、ゆみにはとてもプレッシャーがかかっていた。だから、少し声がふるえていた。

「そう、それならいいけど。じゃあ、行きましょ」

ゆみのことだから、上手に言えた。二人はぶ台うらへ走って入っていった。ぶ台うらに入っていくと、クラスみんなからたくさんほめられた。二人はうき足立ったが、パンを運ぶ作業のことを思い出し、気を引きしめた。ぶ台に出ている人のセリフをじゃましないように小声で二人は話した。

「いよいよね」

パンを落としたらげきが台なし。二人はクラスのみんなにも期待されているため、プレッシャーにおしつぶされそうになっていた。足がガクガクふるえているけんが言った。

「ああ、そうだな」

目の前に本物そっくりのきよ大な紙のパンが置かれる。二人は息を整えた。

「いよいよだ」

声がそろった。それがおかしくてきんちょうがほぐれた。二人はしっかりパンをつかんだ。きんちょうはするが、ぶたいに出たらえがおでいるように二人で決めていた。そのことを思いだしながら二人はぶ台へと歩きだした。

作者 黒猫 (小六)

(これまでのあらすじ)

淳と京子は今から日本最大で超難関の岩登りに挑戦する。淳はその岩の近くにある駅前で京子と待ち合わせをしていた。ところが京子は待ち合わせの時間より十分おくれてやってきた。京子の顔色は少し悪いように見えた。(百字)

京子は何事もなかったようにやってきた。

「おはよう」

あれ？いつもより元気がない。あのうるさい京子はどこに行ったのだろう。さっき顔色が悪いと思ったのは気のせいではなかったようだ。あつ、だまっていたらいけない！また京子のお怒りにふれると大変な事になる！少しあわてぎみに

「ああ、おはよう」

と言った。言った後に少し下を向いたのがいけなかったのか、京子が心配そうな顔で言った。

「どうしたの、つかれた顔。よく寝られなかった？」

図星だ。昨日は、岩登りができるというワクワクする気持ちで興奮しすぎてなかなか寝られなかったのだ。結局、十二時過ぎまでおきていたので今もねむい。でも、そのことを京子に知られたくなかったので、少しごまかしぎみに目線をそらして

「いや、そんなことはないけど」

とそっけなくボソツと言った。けれど、よくよく考えてみるとそう言う京子も顔色が悪いではないか。ぼくの事を心配する前に自分のことを心配した

ら？と思ったが、京子に絶対おこられると考え言わないでおくことにした。そのあと京子は少し間をあけて

「そう、それならいいけど。じゃあ、行きましょ」

と、全く興味なさそうに言った。ふう、ばれなくて一安心。

それから十五分くらい歩いて、そびえ立つ日本最大の岩の近くまで行った。説明をうけたり、装具をつけたりした後、その岩の前に立つ。思ってたよりも大きい……。今からこの岩を登ると思うととてもドキドキする。冷や汗がぼくの頬をつたった。チラッと横を見ると、さっきより悪い顔色で立っている京子がいる。すると京子が

「いよいよね」

と今にも消えそうな声でつぶやいた。

「ああ、そうだな」

ぼくもとてもきんちようしていたが、カッコ悪い所を京子に見せなくなかったので、できるだけ大きな声で言った。そしてもっと大きな声で、

「いよいよだ」

と言って一歩ふみ出した。顔を見合わせた後、ぼくたちは岩に手をのばした。